

「方言」で思う日本語学習

文・李 惠 蓮
(Lee, Hye Ryun)



「ショックを受けた方言…」 「もう来ちゃった」

私の日本での留学生活は、一九九五年五月、熊本で始まりました。韓国の大学を卒業後、その大学と姉妹校である熊本県立大学に研究生として留学することになったのがきっかけでした。その後、本格的に日本語教育について勉強してみたいと思い、昨年の四月に教育学研究科博士課程前期に入学しました。

熊本から広島に来て、一番の文化的ショックは言葉でした。韓国から熊本に来た時にも、韓国で習った日本語と熊本で使われている日本語の差は感じましたが、それよりも日本国内での言葉の差、つまり「方言」の差の方が、

私にとってはもっと大きなショックだったのです。

もちろん、韓国にも方言の差はありますが、韓国語は私の母語ですので、そんなに大きな差を感じたことはありませんでした。しかし、私は特に日本語のアクセントに興味がありましたので、熊本の無アクセントと広島の共通語に近い高低アクセントの差は、大変大きな違いとして感じられたのです。ソウル方言話者の私には、アクセントがないという点では熊本の無アクセントに近いのです。ですから、熊本ではアクセントを全然気にせずに話していました。でも広島に来た時、周りの人たちの話し方に高低の差が激しいことに気づき、驚きました。この高低アクセントを身につけるには、今も苦勞

しています。

熊本方言には、形容詞の「い」を「か」というもの、例えば、「よい」を「よか」というものや、「行くから」の「から」の部分に「けん」というものがあります。広島方言では、このような「けん」にあたるものとして「じゃけん」がありますが、それよりも広島方言の独特な敬語の使い方に驚いたエピソードがあります。

私が大学の保健管理センターに健康診断票を取りに行った時、私が部屋に入ると先生は私に「もう来ちゃった」と言いました。私はその瞬間、何か悪いことをしたような気分になりました。しかし後で分かったのですが、それは敬語だったのです。つまり「いらっしゃいました」の意味だったのです。

このように、共通語の使い方とは違う方言独特の使い方は、外国人や他の地域から来た日本人にとって誤解を招きやすいのです。私の大学院の友だちはみな共通語と方言を場合によって使い分けています。授業の発表の時や外国人に日本語を教える時には共通語を使い、友だち同士の会話では方言を使っています。場面による言語のコードの切り換えや、日本語のバリエーションに私は感動しました。

日本語習得のキーポイント

しかし、ここで考えなければならぬ問題が二つあります。一つは、外国人日本語学習者に対する日本語教育の

国際語としての日本語をめざして

問題です。何を日本語の共通語として学習者に教えるか、というものです。もう一つは、日本語教育における方言教育の位置づけとその実行に関するものです。今、日本語の共通語というのは、一般的には東京方言を指していますが、外国人が日本での実際の生活で接するのは共通語だけではありません。むしろ、方言に接する機会の方が多いのではないかと考えられます。

日本語の教室で教わった日本語と実際の生活で接する日本語の間には、ギャップがあります。外国人は二つの日本語の間で迷ってしまいがちなのです。外国人が日本語を自分の国で習う場合には、教室で使う日本語だけを教わればよいかもしれませんが、日本で日本語を習う外国人には、日本の社会に溶け込んで真の日本を理解していくために一番大切である言語、つまり、方言も含めた日本語の習得がその鍵になると思われます。今後、日本語を国際語として外国人に教える時には、今まで述べてきた、日本語教育の基準や方言教育のあり方が問題になるのではないかと考えています。

今、日本語教育の世界では、日本語の「乱れ」や「ゆれ」が問題になっており、その原因の究明や実態についての調査が行われています。日本語の変遷において、「乱れ」や「ゆれ」が生じ、

既存の基準が崩れてくると、新しい基準が要求されるようになります。そして、新しい基準が制定されると、そのためにまた「乱れ」や「ゆれ」が生じることも考えられます。つまり、「乱れ」や「ゆれ」と新しい基準との関係は、どちらもそれぞれ原因と結果になりうるという循環論的なものではないかと思われるのです。

次に、方言教育の問題ですが、これは学習者のニーズによって、方言を学びたいと思っている学習者には方言教育をした方がよいのではないかと考えています。つまり、無条件に共通語だけを教えるのではなく、学習者が接すると思われる方言の教育も、考慮していかなくてはならないと考えるのです。

二十一世紀の国際語としての日本語を目指すためには、以上のような共通語の基準や方言教育の問題だけではなく、教える側、つまり専門知識を持っている日本語教師や、日本語を教える一般のボランティアの意識の改革についても考える必要があると思われま

プロフィール

- ☆大韓民国ソウル出身
- ☆一九九五年 祥明大学卒業
- ☆一九九五年 熊本県立大学大学院研究科
- ☆一九九六年 広島大学大学院教育学研究科
- 科日本語教育学専攻博士課程前期入学



本人左側

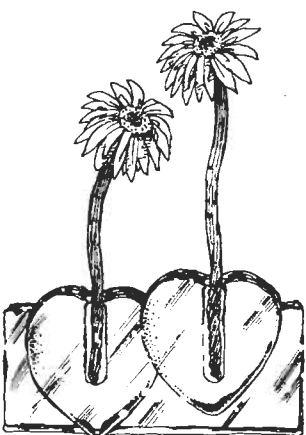
現在、私は嫁と別居している。別居が悪いわけではない。研究活動を優先するためである。嫁は大阪で月給取りをしているから、私はいわゆる「ひも」というやつになる。嫁はほぼ月に一回、金曜の夜に現れる。私がいつも忙しんでいるので、人並みに遊びに出かけるようなことはまずない。滞在中はずっと研究室でくすぶっているのである。

彼女とは合気道で知り合った。そのためか休憩時間には、踊り場で嫁と合気道の練習をすることが多い。通行人は我々を見てびびるようであるが、いつかにおかまいなしである。腹が減ったら研究室で自炊をする。生活費は切り詰めねばならない。私の机の下には真座がしまれているが、めし時にはそこに正座をしていっしょに食べる。お

学生結婚のススメ

あるD3生の新婚白書

文 前 河 正 昭
写真 (Maekawa, Masaaki)
生物圏科学研究科博士課程後期



ままとのようだとみんなから言われる。我々もそのとおりだと思う。しかし真産の効用は計り知れない。しばしの間しゃがみ込んで休息を取ることによって、私は幾多ものピンチ(論文の投稿・修正等の締め切り、ポストの約束事など)を切り抜けてきた。さらに就寝時の心地良さも格別である。研究室に宿泊を余儀なくされる方にはぜひ使用をお勧めしたい一品なのである。

このように、普段は学校で棲息する私であるが、嫁が来たときはさすがに下宿に帰る。時はまたたく間に過ぎ、日曜の夜には東広島駅でお別れとなる。ドクターコースともなるとストレスが多い。時には正気と狂気の狭間に立たされ、絶叫することもある。そんな私が今まで精神的安定を保っていたのは、他ならぬ美知瑠のおかげである。春よ早く来い。私は今、祈るような気持ちで学位論文の発表準備をしている。これが無事終われば、飯綱高原(某自然保護研究所)で二人の生活がようやく始まる。